



盲人のための
国際シンボルマーク

愛の光通信

No. 4

1989年7月

東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局



ネパールの旅から

東京都板橋区 三療自営 石山 米造

前日夕方出発予定のロイヤル・ネパール航空が欠航となったため、カトマンズに入ったのは1月28日であった。この日は、国王の誕生日とあって、バスの駐車場から昼食をとるレストランまで王宮の近くを歩いた。広い通りには人出が多く、その真中を田舎からトラックでやってきた人々が、太鼓を先頭に歌を歌いながら行進していた。町の人は、それを静かにというより関心のうすい態度で眺めているように私には感じられていなかった。

最初に訪れた最も大きなヒンズー教のお寺の入口までの草原を歩きながら妻が案内人に、「このあたりの人達の仕事は」と問うと「農業とものごいです」と答えた。川で洗濯をし、なにかのさかいの鉄条網にそれを乾かしている状況をみながらのことである。久しぶりに小さい子供の伸び伸びした声を青空の下で聞き気持をよくしていた私達にはショックであった。子供達は観光客に金をねだっていたのである。

信者でなければ入れないお堂から聞えてくるお経のリズムは、日本のそれとほぼ同じであった。その声がかすかに聞えるあたりには、もの売りの子供達がしつこく寄ってきてはなれない。彼らの大半は町を行進していた人達と同様にはだしであった。

バンコクの空港で顔みしりになったネパール人の親子連れの女の子は、3、4歳とみえたが、手にしていたポテト・チップの袋が、からになった時、妻が取り出したクッキーをみて、走りよりかわいい手をぱっとひろげた。妻が母親に目であざねると笑顔が返ってきた。

この親子は、ファースト・クラスに入っていたが、貧富の差をまざまざとみせつけられた。また、この飛行機には、ジーンズを何本も重ねてはき、デニムのジャケットだか、ジャンパーをこれも何枚も着こみ、玉の汗をかいているおばさんが数人乗っていた。寒がりの妻は、これから大変な所へゆくんだと不安になったが、彼女たちは関税を逃れるためにこんな姿をしている運び屋であった。ネパールに持ち込めば、それは高い値段でさばけるにちがいない。

民家の多くは粗末な煉瓦造りで、窓にはガラスもない。裸電球が一つ、あとはローソクが補っている。それだけにまさに漆黒の闇で星が大きく輝いている。こんな沢山の星をみたのは、何10年ぶりだろうか妻は寒さを忘れて見上げていた。

ボカラのハイスクールの校庭からは、ヒマラヤの雄大な山容が間近かにみえる。夕陽が真赤に燃えて山なみを浮び上らせる美しさを帰ってすでに2ヶ月も過ぎているのに、妻は話題にしている。そして、カトマンズに魅力はないが、ボカラのフィッシュ・テイル・ロッジには、また泊りたいと2人が同じ思いをもっている。

(中途失明、元内科医)

ヒマラヤ、登った！ 第1回スタディー・



懐かしい国、懐かしい人々

仙台市 宮城県立盲学校教諭 宇和野 康弘

今回のツアーは、二つの点で特筆に価する。訪問した国がアジアで、しかも発展途上国といわれるネパールだったこと、参加した一行34人中、障害者が3分の2を占めたことである。主催者のご努力に心から拍手を送りたい。

ボカラでハイスクールの盲児たちと一緒に、ヒマラヤのレッキングを一日楽しんだときの事だった。普段あまり山歩きなどしない彼らなので、最初は尻みしつとも、こわごわ登っていた。ところが、どんどん登る我々に勇気づけられたのか、下りる頃にはすっかり自信をつけていたと聞き、とても嬉しかった。

また、白杖を手に山を登る盲人の団を、「何だ何だ」と驚きと好奇の目で見ていた近隣の村の子供や大人たちには、盲人への認識を少しは変える力になりはしなかったか。

障害者が同じ障害者のためにできる援助とは、どのようなものだろうか。かつて、ヘレン・ケラーが来日によって、日本の視覚障害者にもたらした影響力の大きさは、誰もが知っている。その何十分の一でも良い、そうしたインパクトをネパールの人々に与えられたとしたら、こんな嬉しいことはない。

いわゆる発展途上国の国々を旅していると、一種の懐かしさを覚える。我々が失いかけている「人間生活の原型」がそこにあるからだと思う。そんな思いがヒマラヤの土の臭いとともによみがえってくる。

(全盲、ソウル・パラリンピック柔道の部・金メダリスト)



日本・ネパールの盲人で！！

ツアーの思いで

井口 淳さま

東京都青梅市 三療家 望月美紀子

今年の冬は、ことのほか暖かく、春の訪れが早く感じられる今日この頃です。青梅でも1日から梅まつりが始まります。私の部屋にも鮮やかなピンクのアザレアの花が咲いています。

先日はお手紙をいただきありがとうございました。また写真や新聞の切り抜きもいただき思い出の一つに加えたいと思います。

私は旅の疲れもなく、元気に仕事にスポーツにがんばっております。

ネパールの旅から早いもので2カ月になろうとしております。多くのすばらしい思い出が心のアルバムに収められ、時折なつかしく思い出しております。ネパールは親しみのもてる素朴で心やさしい国でした。貧しくともゆったりとしていて、なにか心洗われる思いがしました。なかでもボカラの澄み切った空気や雄大な山々に囲まれて過ごした一時は忘れることができません。アマルシン・ハイスchoolの校庭で聞いた子供たちののびのびした歌声や演奏がヒマラヤの夕映えのなかを流れ感動的で涙が流れました。またトレッキングにおいても短い時間でしたが、ジュビ先生やガイドのニマさんとの語らひは大変有意義なものとなりました。多くの現地の人々とのふれあいには言葉は通じなくても少しでも心は通じ合えたと思います。このような2度とない貴重な体験ができたことを心から感謝しております。ヘレン・ケラー協会の職員の皆様、添乗員の杉山様、現地のガイドの皆様にも厚く御礼申し上げます。

これからもこのツアーを継続していくことを聞き、大変うれしく思っております。1人でも多くの視覚障害者が、ネパールの自然や風土にふれることを心からねがっております。そしてこれからの実りある旅行のためにも、健常者と視覚障害者の割合を2対1、それができなければ、1対1にもっていかねばと思います。今回のツアーも健常者が少なかったため、かなりの負担がかかったものと思います。また今回人数が増えたため添乗員が付いたということでしたが、必ず添乗員が付いた方がよいと思います。それからネパール・ツアーの1期生として交流の場を設けていただけたら幸いです。このまま皆さんとお会いできないのはとても淋しく思います。

3月にはハイスchoolのジュビ先生が来日されるそうですが、いらっしゃいましたら、ぜひともご連絡いただきたいと思っています。

ではこれからのご活躍とヘレン・ケラー協会のご発展をいのりしつつ終わらせていただきます。

乱筆乱文にてお許し下さい。さようなら

(全盲、盲老人ホーム勤務)



すこしだけ触って来たネパール

那覇市 三療自営 下地 幸夫

ネパール王国があることを私も知ってはいたが、成田で飛行機に閉じ込められて20時間程我慢したら、私と同様に2本足で歩き、言葉で意志を伝え合う多くの人族(ひとぞく)が生活していて、牛や山羊・犬や猫もいる、鳥や鶏の声も聞こえる新たな台地に解放された。「ネパール」だと言われて私は初めて「ネパールは有り、ネパール人は在るのだ」と確信した。この馬鹿馬鹿しい程の思いは最大の喜びであった。

訪れる奥地で、「ワン ルビー ギブ ミー」と差し出される骨と皮だけの様な少し冷たい手、細腰に異様に大きく感じる軟らかい腹、人の祖先は鶏ではないかと思わされる様な足、そんな彼らが「白い棒を持った人とそうでない人とが手を組んで多勢来るぞ、あれなんだい？」とでも言いながら遠巻きに追て来る。バスの運転手・ホテルのボーイ・現地添乗員・学校教師・彼らは瘦てはなく、こっちが目の見えない人の混じる団体であることも知っていた。スチュワードスの腕は太過ぎた。盲人協会役員やパイロットの腹は大きく固かった。車椅子の上の人やヘレン・ケラー協会の援助で作られた点字書を読む人達もいた。貧しくであれ、裕福であれ、それぞれが一生懸命生きている息吹が伝わって来た。

旅は、安全で、豪華で、リッチの気分の中に行なわれたが、「ガム ギブ ミー」と米軍人の後を列を成して追い駆けた自分らの姿に思い当たり自らを励ましながらまた、ネパールにおける皮下脂肪の差と貧富の差の関係を思いながらの旅であった。多勢の皆様方に心から「ナマステ」。(全盲)

1988年度事業報告

前年度の事業として2台目の点字製版機を送ったが、それらによって現在、点字教科書の製作は順調に進められており、日本式スタイルの点字本が各校で使われ始めている。今年度は盲人同士の交流と、新しいプロジェクトの準備に入り、またネパール人研修生（モンジュ・ダハール、26才）を学院で受け入れた。

一、スタディー・ツアー

4月から5月にかけて、「タイとネパールの盲人を訪ねるスタディーツアー」を企画し、6月から募集を開始した。このツアーの目的は、アジアの盲人への援護事業が軌道に乗り始め、日本国内での理解と協力がようやく広がり始めてきたこの時期に、その成果を現地で確認し、併せてその実状を多くの日本の盲人の皆さんに知っていただくことにあった。

この募集に対して、大変大きな反響があり、当初20名程度の予定であった定員に、40名近くもの応募があった。9月末日で募集を締め切り、定員増を旅行社と共に努力した結果、34名の枠を確保することができた。

10月29日、旅行説明会を当協会で行い、関東在住の参加者を中心に準備を進めた。12月26日、井口理事をふくむ22名の視覚障害者、1名の聾啞者、1名の肢体不自由者と10名の健常者は成田空港を出発、タイで盲人施設を見学したあと、航空機の欠航で一日遅れて28日にカトマンズへ到着した。ネパ



ネパール盲人福祉協会会長、Dr. L. N. プラサド。東京で開かれた「第16回リハビリテーション・インターナショナル世界会議」(1988.9.5-9)へ参加、ネパールの農村リハビリについて発表。(日本リハビリテーション協会の招待)

ール盲人福祉協会の歓迎を受けたあと、ポカラへ飛び、ネパールの盲児童とともに、アンナプルナ連峰の回廊をトレッキングし、貴重な交流体験を得た。尚、このツアーは、ネパールの英字新聞にも報道され、また毎日新聞の全国版で大

きく取り上げられた。



タイの盲人施設を訪問、挨拶する井口淳事務局長。国連のESCAPで障害者プログラムを担当し、バンコク在住中の岡由紀子さんの同行を得て、大変有意義な見学となりました。

二、農村リハビリテーション

新プロジェクト、農村リハビリテーションは、前年度以来香港リハビリテーション協会からプロジェクトの依頼があったもので、7月8日に、\$54,419が入金した。プロジェクト顧問松井亮輔氏(ILO、バンコク)を中心に計画の具体化に着手し、9月5日から9日まで東京で開催されたリハビリテーション・インターナショナル世界会議に、ネパール盲人福祉協会会長のプラサド博士をまねき、ネパールの盲人の実状について講演していただき、同時に農村リハビリの打ち合せ会議を行った。その結果、1989年初頭から開始することで一致を見、そのためネパール政府との協定書原案を11月4日にネパールへ発送した。

12月に、井口理事と野崎事務局長とで交渉に入ったが、ネパール側の協定内容の変更があった為、この段階での調印を見合わせた。以後、協定交渉を継続し、内容の微調整を経た段階で、櫻井理事長がネパールへ出向いて、3月7日、調印した。尚、この理事長のネパール訪問は、「ネパール人づくり協力会」「山根正子後援会」のご協力で実現できた。

農村リハビリのための事業経費として、(社福)丸紅基金より助成が決定し、12月から漸次入金している。

三、モンジュ・ダハールさん受け入れ

山根正子後援会より依頼のあった、ネパール人研修生受け入れについては、聴講生という形で、9月から学院での研修にはいった。この目的は、ネパールで東洋医学の普及を図るために、まず指導者を養成し、将来、ネパールの盲人の職訓練の一助とすることにある。



ネパールへの旅

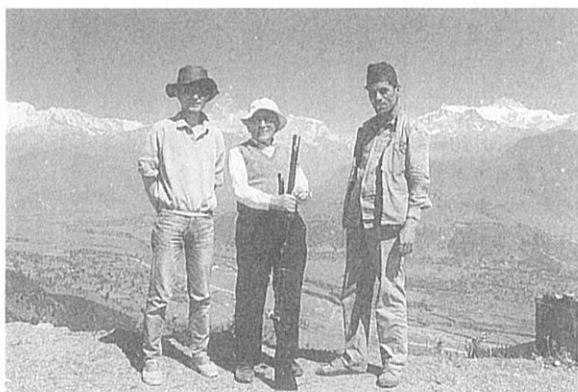
東京ヘレン・ケラー協会理事長 櫻井安右衛門

ネパールと云へばヒマラヤを、ヒマラヤと云へば先ず雪や氷河を思い出す。そのネパールへ出かけたのは、今年の二月末、寒さの厳しい折りであった。約十日間を首都カトマンズとその西に当たるボカラで過ごした。一向に寒くないのが不思議でならなかった。帰国してから地図と地球儀で調べてみたら、中国と印度の間に挟まれて東西に帯状に広がるこの国は、北緯30度の線が北辺を横切り、南端が25度位におさまっている。地球儀を日本に廻してみると、鹿児島県の南、奄美群島の辺りに相当する。寒かろう筈がないのは当然だ。自らの認識不足に驚いた次第である。

この帯状の国は、北部山岳地帯と、中部盆地地帯、南部野地帯とに分けることができる。総人口1,600万人の90%が南部に居住し、農林牧畜業に従事している。国としての生産性は極めて低く、アジアの最貧国に属し、居住状況も藁屋根の茅屋に大勢がひしめきあい、盲目にでもなれば幽閉されているような状況である。この国は水も悪く、衛生状態が悪い。トラコーマや白内障から失明する者が多く、その数は十二万八千人と推定される。

協会としては本年から、印度側のバラ地区を選んで「地域に根ざしたリハビリテーション」(CBR)を実施して、視覚障害者の援護に貢献したいと願っている。

旅を終わるに際し、お世話になった方々にご挨拶をと思い、厚生大臣にお会いしたら、女性大臣であって、保険大臣の名刺をくれた。日本の全国社会福祉協議会に当たる、社会サー



山根正子さんのクリニックや盲学校の視察、日本大使館訪問、協定書の調印と多忙な中、ボカラのサランコットの丘に登り、絶景のヒマラヤを楽しむ櫻井理事長(91才の高齢にも関わらず、元気です。)

ビス調整協議会の福祉委員長も、元気潑刺とした女性で流暢な英語で立派な送別挨拶をしてくれた。

ネパール女性の優秀さに驚かされた私は、この僻地で単身、クリニックを経営して農村医療に挺身している、鳥取県出身の山根正子女士の仕事場を目の当たりに見て、日本にも立派な女性が海外で働いているのに敬意を表すると共に、意を強くして帰ってきた。

第一回スタディ・ツアー参加者と日程表

(敬称略)

賀川友吉(茨城、全盲)	石山米造(東京、全盲)
関 民夫(茨城、弱視)	石山鮎子(東京)
斉藤 隆(愛知、全盲)	大内三良(静岡、全盲)
斉藤玲子(愛知、弱視)	島津真奈(静岡)
高橋聖子(東京、全盲)	宇和野康弘(宮城、全盲)
小林五郎(東京、全盲)	徳江 博(群馬、全盲)
有賀 正(長野、全盲)	徳江 勝(群馬)
藤森 昭(東京、協会職員)	小野寺孝三(栃木、全盲)
福井康雄(福岡、弱視)	井口 淳(協会理事、全盲)
下地幸夫(沖縄、全盲)	染矢朝子(東京)
長谷川一郎(埼玉、全盲)	菅原温子(東京)
長谷川ミユキ(埼玉、弱視)	勝又誠子(東京、全盲)
赤荻 功(埼玉、弱視)	岡村孝二(東京、全盲)
望月美紀子(東京、全盲)	岡村豊子(東京、聾啞)
志和山玲子(東京)	後藤 栄(東京、肢体)
藤喜和子(東京、全盲)	野崎泰志(東京、協会職員)
松川芳徳(毎日新聞写真部)	杉山光次郎(添乗員)

1986年

12月26日(月)	東京発13:55バンコック着18:50。晴。国連の岡由紀子さん出迎え。(バンコック)
12月27日(火)	タイ盲人福祉基金の施設など訪問。欠航でバンコック泊となる。晴。(バンコック)
12月28日(水)	バンコック発10:15カトマンズ着13:30ドゥリケルのレストランで夕食。晴。(カトマンズ)
12月29日(木)	午前中、盲人協会、カグンドラセンター訪問。カトマンズ発カトマンズ着 午後、自由時間。快晴。(カトマンズ)
12月30日(金)	トレッキング、ガルミの丘。ネパールの盲児など一行50人で登る。快晴。(カトマンズ)
12月31日(土)	チベット難民キャンプ訪問。曇り。カトマンズへ。プラサド会長宅表敬。ホテルで越年パーティ。(カトマンズ)
1月1日(日)	カトマンズ発12:00バンコック着16:20 (バンコック)
1月2日(月)	バンコック市内観光。バンコック発23:00(機内泊)東京着06:30

CBR（農村リハビリ）の世界 ——カトマンズからの現地報告——

海外盲人援護事業事務局 野崎泰志

昨年12月26日に東京を出発した「タイ・ネパールの盲人をたずねるスタディ・ツアー」に随行した私は、1月1日に他の参加者をカトマンズで見送り、そのまま残留して、次のプロジェクトの準備の為に、約2カ月間の予定でネパールに滞在している。天皇が亡くなられたのは、ネパールのラジオと新聞で知り、新しい年号の「Heisei」は英字新聞で見ただけなので、どんな漢字かは未だに知らない。1月8日は、ネパール全土が天皇の死去をいたんで休日となり、この時期にはめずらしく一日中大雨が降った。

私達の海外盲人援護事業は、1981年の国際障害者年を機会に、多くの方々のご協力のご理解を得ながら続けられている。1987年には念願の点字印刷所をカトマンズに開設することができ、今回のツアーで訪ねたボカラの学校で、B5版のまぎれもない日本式の点字教科書が使われているのを見て、これを今までご支援下さった方々にお見せしたいものだ、改めて感謝の念で一杯になった。

次のプロジェクトとは、いわゆるCBR（Community Based Rehabilitation）で、農村地域に存住する視覚障害者を対象に様々なサービスを展開する仕事である。日本でリハビリと言うと、途中で障害を受けた人々の社会復帰の為に訓練と言う意味合いが強いけれども、この場合のリハビリテーションは、全く何の訓練も受けたことのない視覚障害者に対して、立つこと歩くことから始める日常生活訓練が中心となる。これは又、その地域の人々の参加によって行われ、障害者が地域社会で自立した生活が送れるようになることを最終的な目標としている。主として発展途上国において、その国の実情に合った新しいリハビリテーションの方法論として、国連を中心に近年開発されてきたもので、多くが発展途上国の農村

地域で展開される所から、「農村リハビリテーション」とも呼ばれる。

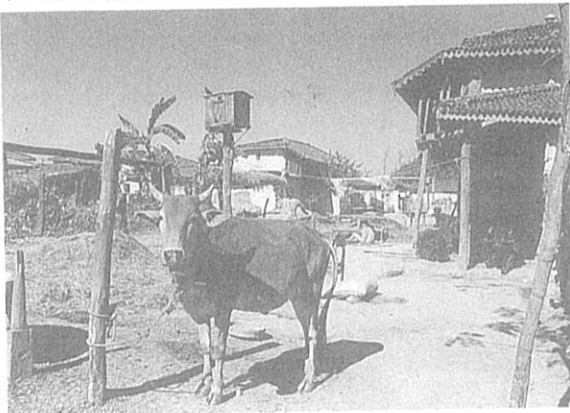
障害者の9割もが農村地域に住むネパールのような国では、施設中心のリハビリテーションだけでは、必ずしも効果は上がらない。カトマンズにも、各国の援助によって建てられ、病院までついている立派な障害者リハビリセンターがある。日本の青年海外協力隊員も2名入っているこのカゲンドラ・ニュー・ライフセンターでは、常時100人ほどの障害児が治療と普通教育と職業訓練をうけている。しかし彼らは所定の期間が過ぎてもそこを出たがらない。村へ帰っても学んだことは何の役にも立たず、ある者は又、物ごいになるしかないことを知っているからである。

こうした実情を背景に、外国への研修の機会がセンターからの退所を条件として与えられるようになってきている。日本のJICAが毎年アジア各国の障害者を日本へ招待して訓練を行う「障害者リーダーコース」にネパールからも昨年足の悪い男性が一人来た。今回彼のことをたずねてみると、案の定帰国後退所して、町で何かしていると言う。将来その国の障害者のリーダーとなるべく用意された（勿論国費で）プログラムは、全く無に帰しているのである。

こうした施設中心のリハビリテーションに対する反省が1970年代になって生まれはじめ、農村リハビリは障害者へのサービスの質の低下を招くと言う、施設専門家の根強い批判に耐えて、多くの実践と論争を経て、今日ではむしろ世界的にみた場合、リハビリテーションの多くはこの方法で実施されるようになった。昨年、東京で開かれた第16回リハビリテーション・インターナショナルの大会では、このCBRが各方面に渡ってテーマの中心であったと見ることもできるほど、話題になっていた。

CBRの特長は、1.低コストで、2.多くの受益者に、3.効果的なリハビリテーションを行う、の3点に要約できる。またその為に、障害者の家族や地域社会の人々の理解と参加を不可欠な要素としており、そうしたネットワーク作りからこのプロジェクトは開始される。

今回、ネパール盲人福祉協会と共同で私達がCBRを実施する地域は、カトマンズのちょうど南、車で7時間ほどのナラヤニ県バラ地区。亜熱帯のタライ平野の典型的な農村地域で、広さは東京都ぐらい、人口は約32万人。ここに3,000人を少しこえる視覚障害者が居住すると推定されている。この地区は又、ネパールで白内障患者が最も多い所としても知られ、中心地のビルガンジには、日本のアジア眼科医療協力会など





の援助によって、眼科病院が建てられている。

CBRは、まずバラ地区をさらに10地区に分け、各地区に一人のフィールドワーカーを配置し、地域のボランティアや行政と連絡をとりながら、視覚障害者を戸別に訪問し、障害台帳を作ることから始められる。こうして見い出される対象者を年齢別に、1.0歳～5歳、2.6歳～15歳、3.16歳～45歳、4.46歳以上、の4グループに分け、第2と第3グループに対して優先的にサービスを提供していく。

これを担当するフィールドワーカーは、その地区に住む人の中から選抜するので、担当地区の言語や習慣に通じており、また地理的にも明るいと言う利点を持っている。彼らはプロジェクト開始前に、6週間の集中訓練を受ける。与えられた一台の自転車が装備の全てで、村から村へと回ることになる。

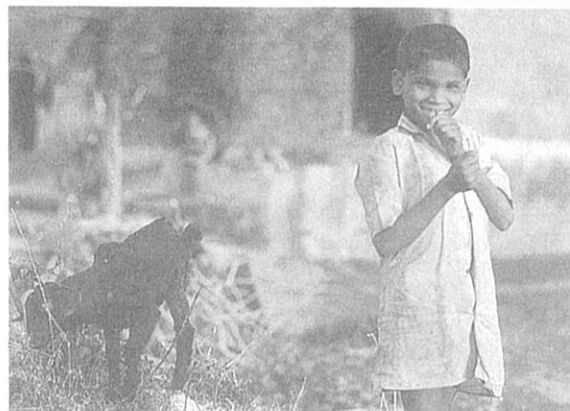
こうして発見されてゆく視覚障害者とその家族に対して、在宅リハビリテーションの基礎訓練を行うと同時に、治療の必要な人は近くの病院へ送り、学齢期の子供は統合教育校教育を受けられるよう指導し、能力のある成人に対しては、地域の実情に合った職業訓練を行い、何らかの生産活動を継続して行えるようバックアップすることになる。こうした活動を2年間実施し、最後の一年間はこの評価とアフターケアを行い、報告書にまとめてこのプロジェクトは終了する。

実際にはフィールドワーカーの仕事はなかなか大変で、一昨年、西ドイツの資金で東ネパールで行われているCBRを見学した際、フィールドワーカーが戸別訪問する昼間は、多くの農民が野良作業に出ていて、うまくコンタクトがとれないと、責任者のダウバーデル教授はこぼしていた。又、スタートするまでの準備も、窓口機関の社会サービス調整協議会との交渉など色々ある。

ネパール盲人福祉協会は現在までに幾つかのCBRを既に実施している。一つはカナダのユニテリアン・サービスセンターの援助で、バクタプールで行っている水牛と鶏の貸しつ

けプロジェクト。二つ目は、ユニセフの援助によるキルティブルでのプロジェクト。これは各種の障害者が対象となっており、その内、視覚障害者を盲人福祉協会が担当している。三つ目は、WBU（世界盲人連合）の資金によるロータートでのCBR。昨年3月に行われたこの開式式典にはプレクシャ王女と共に文部大臣以下関係者が出席、WBU会長のアル・ガニム氏と、アジア盲人協会のラル・アドバニ会長も出席している。四つ目は、アメリカの国際ヘレン・ケラーの援助によるカブレでのCBR。これも昨年スタートしており、ハラレ氏と言う駐在職員が管理している。又、近々、西ドイツのCBM（クリストフェル盲人ミッション）もカトマンズ盆地で大きなCBRを5年間に渡って開始する予定になっており、又、カナダの南アジア・パートナーシップもダングでのCBRに着手している。

こうした中で、言わば遅ればせながら日本からの援助によるCBRが開始されるわけで、この経験は非常に貴重な教訓を日本の関係者にもたらすと思われる。と言うのは、こうした障害者リハビリテーションの分野でのNGO（民間公益団



体)による様々な実績の上に、先進各国で共通にみられるように、政府開発援助が助成されるようにならなければ、息の長い協力はとても望めないからである。日本の外務省は既に1989年度予算に1億円のNGO助成予算を組み、今後の拡大に期しているが、こうした民間事業重視の政策は、出先の各地大使館にも徹底していて、今回、駐ネパール日本大使館では、私達のCBRプロジェクトへの協力はもとより、今後の政府-民間の協力関係の在り方まで提案されて来た。その意味でも、是非今回のCBRをきちんとやりおこせたいものである。

1月4日、ネパール盲人福祉協会では盲児童や関係者約30人が集まり、ルイ・ブライユ(点字を考案したフランスの盲人)の生誕祭を行っていた。子供達が次々と、点字で用意して来た自作の詩を読み、年長の者は長いスピーチを行った。そのネパール語は私には全く理解できなかったが、その美しい調べと共に、彼らのブライユに対する心からの感謝の念は、私の心を強く打った。この子たちに幸あれと願わずにはられない。私もスピーチを求められ、日本点字が今年で100年をむかえること、ネパールと同じように、開国して20年目頃に点字が生まれたこと、だから来たるべき80年を、日本の盲人に負けまいよう努力して欲しい、と締めくくって子供たちへの言葉とした。くしくもその部屋の真下には、日本から送った点字製版機と印刷機が収まっているのであった。

(カトマンズにて、1989.1.9『点字ジャーナル』より転載)

〔SSNCCとの協定書〕

AGREEMENT BETWEEN
SOCIAL SERVICE NATIONAL COORDINATION COUNCIL
AND
TOKYO HELEN KELLER ASSOCIATION

The Social Service National Coordination Council (hereafter called the "Council") and the Tokyo Helen Keller Association based in Tokyo, Japan (hereafter called THKA) registered nationally as a non-profit, non-religious, non-political affiliated, and humanitarian organization entitled to utilize its internal resources and resources applied from others being desirous of promoting efforts for the purposes of promoting Community Based Rehabilitation (CBR), (see attached details) in close cooperation with the "Council" and have agreed to form a joint committee, and have agreed to

(4)

designated by it. The cost for these tasks would not exceed more than five percent which will be borne from the project cost itself.

Kali Prasad Rijal
Member Secretary
Social Service National
Coordination Council.
Date: March 4th, 1989

Yasuemon Sakurai
President
Tokyo Helen Keller
Association.
Date: March 7th, 1989

トヨタから寄贈受ける CBRプロジェクト用に

車体文字はヘレン・ケラー女史の言葉に
「アジアの」をつけ加えました。

HOLD YOUR LAMP
A LITTLE HIGHTER
FOR THE ASIAN BLIND
DONATED BY TOKYO HELEN
KELLER ASSOCIATION
(あなたのランプを今少し高く掲げて下さい。
アジアの盲人のために)



トヨタハイエースコマース



トヨタランドクルーザー



ナマステ（今日は）、私が製版士です ネパール盲人福祉協会の点字印刷所

カトマンズはトリプルジュワール、ブルースターホテルの真向い、バグマティ川に沿った一角に、盲人福祉協会があります。タクシーかオートリクシャに乗って、「ホテル・ブルースター」といえば、市内のどこからでもすぐに着きます。そこの古ぼけた寺院が事務所。その一階の8畳位の広さの部屋が点字印刷所で、その狭い所に、製版機と印刷機が各2台。製版、校正、製本の3人の係が働いています。

写真の左の男性は盲人で、校正の仕事をしています。製版が終わったばかりの亜鉛板をじかに校正しているのが、ネパールらしく何ともスサマジイ感じです。普通は一度、点字用紙に印刷して校正するのですが、紙を節約しているのでしょう。日本の皆様の援助でスタートしたこの小さな印刷所は、雇用の増大に少しばかり貢献し、又、徐々に盲児教育の普及の基礎を築きつつあります。



点字教科書を手にする盲児童 ポカラのアマルシンハイスクールにて



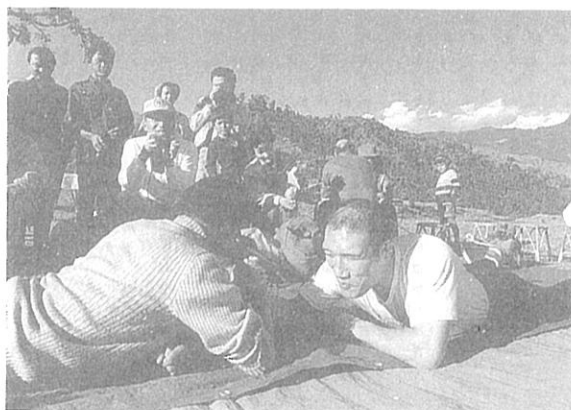
聖子ーッ！ アンタ、こんな所で何してんの？ ポカラの空港でのハプニング



カトマンズから空路ポカラへ着いた時のことです。アンナプルナの神秘的な威容に見とれているうちに、ちょっとした草原へ向かって飛行機が急に降下を始めたかと思うと間もなく、その何もない原っぱへ着陸していました。小屋のような建物が二つあって、そこをわざわざ通って外へ出ます。わざわざというのは、原っぱのどこから出ようと勝手、みたいなものだからです。その小屋のすぐそばに、双発のプロペラ機が横付けになって、私達はタラップを降りたのです。

ものの20歩も歩けばその小屋という距離。参加者の一人、全盲の高橋聖子さんが散歩歩いた所で、待合室になっている方の小屋の窓から、「聖子ーッ！ 高橋聖子ーッ！ アンタ、こんな所で何してんのー」と突然黄色い声が飛んで来ました。何と彼女の親しい友人が、やはりトレッキングで来ていて、今からカトマンズへ帰る所とのこと。白杖をついた高橋さんが飛行機から降りてくるのを見て、初めは声でもなかったのですが、そのあとも続々と盲人が降りてくるので、またびっくりしたそうです。その後しばらく、「アンタ、こんな所で何してんの？」と云うセリフが参加者の間ではやりました。

名だたるシェルパも全滅 ヒマラヤの腕相撲大会、柔道五段の宇和野さん



昭和63年度会計報告

自 昭和63年4月1日 1988
至 平成元年3月31日 1989

海外事業

収入の部		支出の部		
項 目	金 額	項 目	金 額	摘 要
協 賛 金 収 入	1,686,681	海 外 援 護 費	1,950,000	事業費
募 金 収 入	3,588,416	海 外 出 張 費	135,047	"
テレホンカード	106,659	人 件 費	199,395	
他販売収入		旅 費	161,680	
雑 収 入	148,488	一 般 物 品 費	172,800	
		印 刷 製 本 費	389,562	
		役 務 費	170,804	
		借 料 損 料	198,840	
		雑 費	117,416	
		仮 受 金 支 出	100,000	
		預 り 金 支 出	1,332	
前年度より繰越	3,113,313	次年度へ繰越	5,046,681	
合 計	8,643,557	合 計	8,643,557	

農村プロジェクト特別会計

収入の部		支出の部		
項 目	金 額	項 目	金 額	摘 要
助 成 金 収 入	8,520,681	海 外 援 護 費	629,000	ネパール第一次予算
雑 収 入	232,053	海 外 出 張 費	2,180,060	
		次 年 度 へ 繰 越	5,943,674	
合 計	8,752,734	合 計	8,752,734	

寄付者ご芳名

(50音順)

自 昭和63年4月1日
至 平成元年3月31日

[illegible]



協賛者ご芳名

(順不同・敬称略)

自 昭和63年 4月1日
至 平成元年 3月31日

〈北海道〉
江差信用金庫
空知信用金庫
文化女子大室蘭短期大学
北海道薬科大学
〈青森県〉
青森米穀卸
吉プロモーション
青森明の星短期大学
桜田病院
宮森正昭
〈岩手県〉
花巻市役所
〈秋田県〉
大館市社会福祉協議会
大滝運輸
錦マルシメ
〈山形県〉
主婦の店鶴岡店
〈宮城県〉
鶴見屋商店
東北高校
東北電力
〈福島県〉
会津中央病院
会津高田町
石川町役場
西会津町役場
ひめゆり総業
〈群馬県〉
赤城村役場
錦ソフィア
マックス
〈栃木県〉
足尾町
柳津町
白沢電気
第一電子工業
積山食品工業
宮下眼科医
東武建設
〈茨城県〉
神栖町社協
弘和電機
忍野村農協
錦タイヨー
つくば市谷田部
富里町役場
波崎町社協
錦田町役場
細谷建設工業
結城病院
井坂啓
石津建材
伊勢基
茨城倉庫
茨城県食料販売協同組合
茨城ヤナセ
白菊酒造
鈴木実
関彰商事
第一スーパー
筑波町役場
〈埼玉県〉
武州ガス
町田信重
大東ガス
東京オイレスメタル工業
錦日高カンパニー倶楽部
マツモト電器
丸山記念病院
〈東京都〉
町田税務会計事務所
アキ音楽事務所
アサヒビール
有栖川スタジオ
青英(大学入試指導センター)
大橋サビー紹介所
鬼怒川ゴム工業
協同乳業
キリンビール
暁皇国際学園
九段会館
月桂冠
国語作文研究所
園分労組
甲子羽電機
コムデギャルソン
佐島電機
サンド薬品
真如苑

仲和製菓
潤徳学園
世界救世教
太平洋証券
宝酒造
錦大黒屋
大和証券従組
中央ナショナルデータ
千代田法律事務所
電気事業連合会
東京ガス
錦トキワプラザ
特別区競馬組合
同潤会病院
童門冬二
中野市
錦ニコソ
日教組
ハイムインターナショナル
八幡建設
ホテル霞友会館
マツインタープライズ
萬有製菓
武蔵工業大学
ヤクルト販売多摩
錦渡辺富工務店
阿含宗東京本部
秋枝病院
麻布教育センター
錦天塩
有賀信男
伊勢丹労組
イトーヨーカドー労組
今井通子
インターキー
植田さとし
江州建設
エステー化学
オーキッド
王子製紙
オリエンタル写真商事
海外経済協力基金
花王
柏木俊彦
花蔵院
兼松セミコンダクター
カルビー
カルピス労組
錦紀文
教育同人社
クラヤ薬品
京急開発
光文書院
錦小林コーセー
錦サウンドクラブ
サッポロビール
三洋証券
資生堂労組
錦社会調査研究所
昭栄化工
商業労連
錦しんきんクレジット
順心女子学園
杉田製線工業
住友スリーニム
正則学園高校
専修大学付属高校
セントラルスポーツ
全国理容環境衛生同業組合
相互ビルディング
ソノリ食品
太知商事
台糖ファインダー
大鶴薬品工業
錦武富士
立川ブラインド
第一企画
第一相互銀行
大東カオ
中外製菓
錦テオーシー
寺内大吉
電源開発
東京都六市競艇事業組合
東京ビジネスカレッジ
東京専売病院
東芝労組府中支部
東邦生命保険
東洋水産
東和証券
常盤興産
錦豊島園

トット基金
中田輪業
ナショナル証券
日清製粉
日本学園高等学校
日本館道
日本ロッシュ
日本アイビーニム
日本勸業角丸証券
日本証券金融
野沢米穀店
野津漬物食品
野村証券
錦服部セイコー
早川ダット工場
日野自動車羽村工場
深沢信夫
フコク生命研修センター
富士ゼロックス
錦文祥堂
ホウライ乳業
錦ホリ企画
ボッシュ
町田栄友会進学教室
松井証券
マリナーズ
錦マルシンフーズ
丸見屋食品工業
三越百貨店労組
三菱電機労組
武蔵野女子学院
村田建設
明星学苑
錦山田洋行
山田森一
ヤマト商会
錦ユカ
豊商事
ユニテッドスチール
ユニオンソース
横山光輝
レリアン
ロッテ労組
渡辺酒造
神東実業
錦アピカ
〈千葉県〉
夷陽町
大館市社協
小見川町
君津学園
聖徳学園
千葉公営競技事務所
松戸市役所
横芝町
我孫子市役所
石島胃腸病院
江尻隆
(株)岡田不動産
光栄企業
錦千葉日産サニー
東洋エンジニアリング
習志野鉄工団地協同組合
ボーソー油脂
森永エンゼルカンパニー
渡辺建設
〈神奈川県〉
一幸電子工業
オーサワ
小田薬局
シズメ歯科医院
タカナン乳業
電気化学工業
奈良屋セントラルプラザ
西相信金
程ヶ谷カンパニー
山口菓子
横浜エージェンシー
味の素川崎工場
伊豆箱根鉄道
磯子ミリオンプール
上野戸歯科医院
錦上野運輸商會
英教研究所
小田原湯本カンパニー
神奈川相互銀行
川崎大師平間寺
関東自動車工業労組
錦コヤマライビングスクール
自治労神奈川本部
千代田計装
錦東海金属

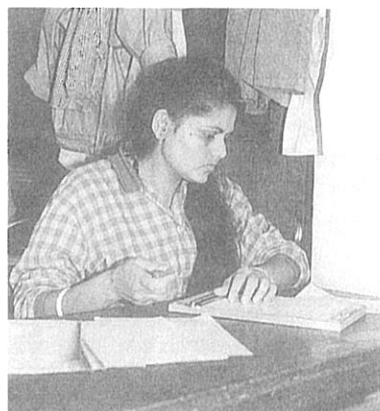
内藤電工工業
中丸莊一郎
日栄運輸倉庫
ハニーミルク
平塚競輪主催者協議会
藤沢さいか屋
富士スーパー
錦丸う田代商店
ミナトエレクトロニクス
湯河原カントリークラブ
横浜高島屋労組
横浜女子商業学園高校
〈山梨県〉
北富士農協
昭和町役場
錦シチズン電子
日新機山製工場
ヤマビ液化ガス
〈新潟県〉
豊栄社協
錦三原田組
伊藤製作所
スベキ新潟販売
中野建設工業
新潟日産自動車
新潟ダイハツモータ
日本マネージメントアカデミー
〈富山県〉
大川寺病院
佐島工業
トナミ運輸
〈岐阜県〉
奥濃飛白山観光
岐阜瓦葺
岐阜経済大学
錦吉川組
〈長野県〉
伊那町役場
おでん山荘
志賀町役場
サニークントリークラブ
日精工ニスビー機械
松本歯科大学
〈静岡県〉
静岡英和女学院
袖ヶ浦社会福祉協議会
TOKAI
ニッセー
松蔭
アスモ
伊東カンパニー
小松川ガス
静岡英和女学院
清水市福祉課
新南駿病院
瀬尾整形外科病院
日本大学三島高校
八洲水産
ヤマハ発動機
〈愛知県〉
中基酢店
中京大学
〈石川県〉
粟津農協
(株)金城学園
小松ウオール工業
十全会
竹田建設
北設電興
北陸日本電気ソフトウェア
宮地組
〈福井県〉
武生市役所
勝生コンクリート
〈京都府〉
神慈秀明会
京都西高等学校
錦互助センター
龍神経営社
〈大阪府〉
大倉建設
錦オカハシ
参天製菓
ダイセル化学工業
浜田印刷機
〈兵庫県〉
神戸市民生局
錦ノース
〈福岡県〉
福岡工業大学

ネパールの盲人のため鍼灸を学ぶ

モンジュ・ダハール

私は東洋医学の鍼灸術を習いたため、1988年の1月の29日日本へ来ました。日本語を勉強しなければならないので、「日本ネパール人づくり協力会」の所在地鳥取、米子市に着き、その中学校で文字や言葉を習いました。

私はネパールで大学を卒業してから、ずっと貧しい人たちのためにボランティア活動をしていました。1983年にネパールへ行って同じ所でボランティア活動を始められた山根正子さんと知り合いになり、山根さんの針を使って治療をされる姿を見て、とても感動しました。私も小さい時から、貧しい



人たちのために医者になりたいと考えていたので「これだ」と思いました。母国の視覚障害者のために針は役に立つと思って、山根さんと相談をして日本へつれて来ていただきました。

この目的のため1988年の7月に東京に来ました。9月からヘレンケラー学院で

聴講生として年前中は勉強をしながら年後ヘレンケラー協会で働かせていただいております。いろんな方々の協力での研修をさせていただいております。

お世話して下さったのは、米子で私がホームステイさせていただいた、日本ネパール人づくり協力会の会長森田産婦人科院長（鳥取教育委員長）、日本ネパール人づくり協力会の事務局長広江研さん、正子山根後援会の会長中曾栄吉さん、東京で植村キミコさん（植村ナオミさんの奥さん）、東京で8ヵ月ぐらいホームステイさせていただいた高崎勝代さん、ヘレン・ケラー学院と協会の方々、日本語を教えていただいた伊藤先生（インタカルト日本語学校）方でとても感謝しております。

ネパールの視覚障害者教育の歴史はまだ始まったばかりである。この先いっそう充実させていくために多くの経費、人手を必要としている。私は日本でさまざまなことを学び、でも国で役に立てればいいと、お願いしながら日本ですごしている。どうか日本の皆様よろしく願いいたします。（固有名詞以外原文のまま）

※日本ネパール人づくり協力会及び山根正子後援会の招請研修生。当協会ヘレン・ケラー学院鍼灸科で研修中。既に日本語の点字も習得した。

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第215条第4項および、法人税法施行令第77条第4項にかかざる社会福祉法人でありますので、所得税法第78条第2項第3号および、法人税法第37条第3項の規定が適用され、当協会に対する寄付金は次の通り、寄付金控除または損金算入について税法上の特典が受けられます。

1. 個人の方が寄付をする場合は、

寄付金控除額＝（寄付金額と年間所得の25%のどちらか低い方）－1万円

2. 法人が寄付する場合は、

一般寄付の場合の損金算入限度額の2倍まで、損金算入枠が拡大されます。

編集後記

今回は障害者が34名中24名という多数にのぼり、今から思えば多少冒険的なツアーでした。しかし、ロイヤルネパール航空が例によって欠航となり、バンコクでホテル探しに苦労したこと以外は、幸いに事故もなく、ご参加の皆様のご自覚ある行動の結果と、感謝にたえません。たまたま私達の友人に誘われて、ボランティアをかって出た日本の青年は、ボカラで1日行動をともにしてくれた後、目を輝かせて別れ際に言いました。――「障害を持っておられる方が、こんなに真剣に頑張っているのを見て感銘を受けました。お手伝いできて本当に良かった。」ネパールでも、私達が登った丘は、その後地元の人々に「BLIND HILL」（盲人の丘）と呼ばれているそうです。（Y. N）



**TOKYO
HELEN KELLER
ASSOCIATION**

発行：社 会 東京ヘレン・ケラー協会
福祉法人 海外盲人援護事業事務局

住所：〒169 東京都新宿区大久保3-14-4
毎日新聞社早稲田別館内
TEL (03) 200-1310

郵便振替 東京5-91688
銀行口座 三井銀行 新宿支店 普通預金 5101190